



約

東

の

街

北方謙三

たとえ朝が
来ても

角川文庫

あさ き
たとえ朝が来ても

きたかたけんぞう
北方謙三



角川文庫 10166

平成八年十月二十五日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)三三三八―八四五―

営業部(〇三)三三三八―八五二―

〒一〇二 振替〇〇―一三〇―九―一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——太谷製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

たとえ朝が来ても

北方謙三



角川文庫 10166

1 女房

別の世界が拡がっていた。

トンネルを潜る前とは、陽の光まで違うもののような気がする。私は、苦笑した。トンネルを出た通りの名が、リスボン・アヴェニューときたのだ。そのくせしばらく走ると、二の辻という古めかしい名の交差点があった。私はそこを左に曲がった。日向見通りという、これまた古い名だったが、ちらりと見えた袖看板の多い通りは、サンチャゴ・アヴェニューと表示されている。

住所と番地を辿った。

不意に、古い家の多い地域に入った。そこには逆に新しいものはなにもなく、家並みも郵便ポストも店に出ている看板も、みんな古かった。

「なんだったんだ、ここは」

思わず、声に出して呟いてしまうほどだった。それでも、町名と番地は少しずつ近づいてきている。

路地の手前で、車を停めた。降りると、しっかりとロックする。いまでは、このポルシェだけが、私の全財産だった。911カレラ2。一年前に、即金で買った。走行は、ようやく八千キロに達している。

番地を追いながら、私は歩いた。まるで東京の下町という感じの家並みで、玄関先に盆栽などが並べられた家もある。

ようやく、見つけた。山崎という表札が、ちゃんとかかっていた。

チャイムを鳴らす。しばらくして出てきたのは、スポーツ刈りにした男の子だった。中学生になったばかりか、と私は見当をつけた。

「お父さんは？」

「いません」

「お母さんは？」

「仕事に行ってます」

「仕事って、どこへ？」

「どなたですか？」

母親の居所を喋らないというより、きちんと躰しっけがしてあるという感じだった。

「これは失礼。波崎という者で、御両親にちよつと訊きたいことがあって、東京から来たんだ」

「母は、夕方まで帰りません」

少年が、足首に繃帯を巻いていることに、私は気づいた。

「お勤めは、どちらかな？」

「ホテル・カルタヘーナです」

私は頷いた。やはり、よく馴染られた子供らしい。男の子が二人だと山崎は言っていたが、年齢からして弟の方だろう。

「怪我は、捻挫かね？」

「はい。サッカーをやってますから」

「大事にな」

私が言うと、男の子が頭を下げた。

私は車に戻り、通りかかった主婦らしい女に、ホテル・カルタヘーナの場所を訊いた。

引き返し、二の辻を過ぎてドミンゴ・アヴェニューとの交差点を右。突き当たったところが須佐街道で、その塀はホテル・カルタヘーナの塀である。

教え方は非常にわかりやすかったが、突き当たったところにホテルらしい建物はなかった。塀のむこうは、木立である。私は戸惑ったが、塀に沿ってしばらく走ると、ようやく門に行き着いた。

さりげない門だが、これまたさりげなく監視カメラが付いていた。私は、ちょっと肩を

竦めた。門扉が閉じられているわけではない。私は門内に車を乗り入れ、外来と書かれている方へ行った。だだっ広い敷地で、玄関までしばらくかかったような気がした。

駐車場に車を入れる。どこからか老人が出てきて、駐車券を渡した。チップでも要求されるのかと思ったが、渡すともう背をむけて歩み去っていた。

ロビーは広く、左側がフロントだった。

「客ではなく、従業員で、山崎有子という人を訪ねてきたんだが」

「従業員に、そのような者はおりません」

名簿をくることもなく、フロントクラークは言った。中年の痩せた男で、ダークスーツをきちんと着こなしている。

「しかし、職場はこのホテルだと聞いたんだけどな」

「当ホテルには、テナントもいくつか入っておりますし、ツアー会社のオフィスなどもございます」

「店やオフィスにひとつずつ顔を出して、訊いて回るしかないのかね？」

「その廊下を行かれたところに、ムーン・トラベルという会社のオフィスがございます。そこから訊いていければよろしいのではないかと」

私は礼を言った。はじめからその会社に行けと言えばいいのに、とは言わなかった。これが、まっとうなホテルマンというものだ。

ブティックや宝飾店などが並んだ廊下を行くと、すぐにムーン・トラベルと札のかかったドアが見つかった。

中にはカウンターがあり、パンフレットなどが並んでいて、若い男と、それよりかなり歳上の女が座っていた。

「山崎さん？」

私が言うと、女が頷いた。

「波崎という者だが、ちょっと時間を貰えないかな？」

「どういう御用件でしょうか？」

「山崎進一氏のことについて」

山崎の名を言うと、女の表情がはつきりわかるほど強張った。

「いま、勤務中ですので」

「客がいるようには見えないがね」

「勤務時間中ということですよ」

「終るのは？」

「えっ」

「俺は、どうしても山崎進一に会わなくちゃならないんだ」

「それについてなら、なにもお話しすることはありません。離婚していますし、何年も会

っておりませんから」

「籍は抜かれていないので、別居ということでしょう」

「離婚同然ということですね。裁判をしている余裕も、あたしにはないものですから」

「まあ、夫婦であろうとなんであろうと、俺にはどうでもいい。山崎は、どこにいます?」

「困ります、そんなことおっしゃられても」

「俺も困ってる。だからわざわざここまで来たんだ」

若い男が、立ちあがった。私は、山崎有子を見つめていた。

「あんたね」

男が言う。

「人の迷惑ってことを、考えないのかよ。ここは会社で、いま彼女は仕事中。それぐらい見りゃわかるだろう」

「じゃ、仕事をしてるよ、坊や」

「なんだと」

「ほう。それが、監視カメラまでついてる、一流ホテルで働く人間の態度か。まるで俺が悪いくともしてるみたいじゃないか」

「してねえと思ってるのか、このタコ」

「やめて、野中くん」

「こういう野郎は、口で言っただけでわかんねえんだよ」

「やめてよ、ほんとに。あの、帰っていただけませんか。何年も前に別れた主人のことに
ついて言われても、あたしにはどうしようもありませんから」

「そうか。しかし、俺はまた来ますよ」

私は、部屋を出た。

すでに夕方近くになっている。私はロビーの反対側にあるコーヒーラウンジで、勿体ぶ
った名前のついたコーヒーを飲んだ。器も凝ったものらしいが、コーヒーはコーヒーだっ
た。

「このホテルで、食事もできるのかな？」

ボーイを呼んで訊いてみる。

「前日に、御予約をいただかなければなりません」

まったくもって、大袈裟なホテルだった。

ロビーが見える席で、私は五時半まで待っていた。それから駐車券に判を貰い、ラウン
ジを出た。従業員専用と書いてある駐車場の方へ、私はゆっくりと歩いた。

「お間違えではありませんか？」

ガードマンが出てきて言った。

「駐車場に行こうと思って」

私は駐車券を見せてとぼけた。

「それは、お客様用の駐車場で、外来と御宿泊の二つの駐車場があります」

「こっちは、従業員専用なのか」

はじめて気づいたふりをして、私は自分の車へ戻った。

門を出てしばらく行くと、通用口と書かれたところがあり、そこが従業員の出入りする場所のようだった。

三、四台の車が出てきた。

私は、門から二十メートルほどのところに車を停めた。ショップやオフィスが終る時間なのか、人や車が次々に出てくる。

白い軽乗用車。念のため、ナンバーを頭に入れた。

すぐに尾行^{つげ}することはなかった。

しばらくして、私は山崎家がある方に走り、近所の駐車場に白い軽乗用車がいることを確認した。

もう秋で、陽が落ちるのは早い。

かなりの数のホテルがあった。私は安そうな造りのホテルをいくつか回り、一番安いところ素泊りで宿をとった。街の中心近くで、海にも面していないホテルだった。

フロントで、街の地図を貰った。古くからある小さな村が、いきなり大リゾート地に発展したらしいということが、地図を見るとよくわかった。山崎有子の家は、山寄りの旧市街の真中あたりだろう。

ホテル・カルタヘーナと、山裾にある神前亭の二つが、群を抜いて大きかった。

私は、サンチャゴ通りにある小さなレストランで、カレーライスをかきこみ、山崎有子の車を見張れるところまで行った。

まずは、車を見張る。ほかにはバスとタクシーの交通機関があるだけで、車を使う可能性が一番高いと思ったからだ。二日それをやって駄目なら、次は山崎有子の家を見張る。その先は、考えていなかった。

私は、十台ほどの車が並んだ駐車場から、眼をそらさないようにしていた。私のポルシェは、この街ではそれほど目立つ車でもなさそうだった。メルセデスからジャガーまで、何台か走っていた。

十時半を回ったころ、山崎有子が駐車場へやってきた。

山崎に会いに行くのかどうかは、必ずしもわからない。それでも、ひと晩車の中で過すのは、なんとかまぬがれたようだ。

白い軽乗用車は、日向見通りを東へむかって走り、二の辻を過ぎ、ドミンゴ通りとの交差点で左折した。突き当たりは、山際新道という表示が出ていて、左へ行けばトンネルの

入口、右へ行けば須佐街道と合流する。

有子は右折したが、二百メートルほどで停まった。右側は寮や保養所で、左側は公園やグラウンドがある場所だった。

時々車が通るだけで、人の姿はほとんどなかった。

有子は、公園の中へ歩いていった。公園には街灯があるが、暗がりも多い。姿を見失わないように、私はいくらか距離を詰めた。

いきなりだった。私は体当たりを食らい、二、三メートル吹っ飛ばされた。すぐに腹に蹴りがきた。ひとりではない。躰からだを丸めて転がり、私は立った。三人。二人が、同時に体当たりをかましてくる。私はひとりの顔に右のストレートを叩きこんだが、背後からの体当たりで、また吹っ飛ばされた。執拗に靴が追ってくる。立った。ひとりにぶつかり、抱えあげようとした。脚を蹴られ、膝が折れた。抱えこんだひとりを、私は放さなかった。もつれて倒れる。馬乗りになったが、一発も叩きこまないうちに、蹴り倒された。

三人の中に、山崎はいない。それを確かめ、私は背中を丸くした。腹に、続けざまに蹴りがきた。

それで終りだった。足音が遠ざかったので、私は徐々に躰をのばし、大の字になった。水銀灯が、やけに眩しい。眼を閉じた。しばらく、その姿勢でじっとしていた。躰の方々に、熱いような感じがある。骨などは、折れていないだろう。蹴られる時も、できる

だけ急所は庇っていた。

ゆっくりと、上体を起こした。腹のあたりが、一番ひどい。強張っていくような痛みが、まだ続いている。

立ちあがり、水銀灯のポールに手をついて、私は胃の中のものを吐き出した。

2 治療

まったく手がかりがないわけではなかった。

私はまず、ホテル・カルタヘーナの通用門を張った。ホテルの従業員が、次々に出勤してくる朝の時刻だ。有子の、白い車も入っていった。私は通用門が見渡せる、旧市街の路地の奥に立っていて、人の出入りが少なくなるまで一時間ほど見張った。

それから、中央広場と川を挟んだ位置にある、マリーナを見張った。ムーン・トラベルの重要な仕事は、クルージングなどであると調べたのだ。所属のクルーザーは三艘で、ほかにモーターボートが数隻いる。

私はマリーナを歩き回り、三艘の船を確かめた。一艘は、六十フィートはありそうな、二本マストの帆船だった。

クルーらしい人間の溜り場にも、顔に痣あざのある男はいなかった。諦めなかった。午後に

なれば、もう一度ホテルを張ってみるという手もある。

昼食のために中央広場に戻り、役場や銀行が並んでいる通りを歩いている時だった。駐車場から、やたらに大きな音楽が聞えてきた。古いアメ車のコンバーチブルで、運転している男の眼のまわりに、蒼い痣があった。サングラスをかけ直した時に、それが見えたのだ。

おあつらえむきに、派手な車に乗っていてくれたものだ。

私は、ジーンズにジャンパーにサングラスで、きのうのスーツとはまるで違う恰好をしていた。むこうが気づいた気配はない。

一発だけストレートを決めておいたのは、そのために十発は多く蹴られたとしても、無駄ではなかった。私は昼食を諦め、自分のポルシェに戻り、待ち続けた。男は昼食にやってきていたらしい。一時間ほどで、煙草の煙を吐きながら戻ってきた。フルオープンにしたコンバーチブルで、また音楽を撒き散らしはじめる。

走っていくコンバーチブルと十分な距離をとって、私は付いていった。

男はちょっとした広場に車を駐め、パチンコ屋に入っていた。私も、少し遅れて入った。客ではなく、店員のようだった。

私は、両替した千円を、あっという間にすった。まったく、いまましい街だ。

店員は、胸に名札をつけている。私は、玉を買うふりをして、男の脇を通り、名札を見

た。室井と書かれている。

パチンコ屋を出、コンバーチブルが駐めてある広場へ行くと、私はボディに三カ所ほど傷をつけてやった。そこは広場と言っても、四台ほどの駐車スペースがあるだけで、いずれなにかが建てられるようだった。

番号案内で調べて、パチンコ屋に電話を入れる。

室井さんと言うと、店長ですね、という声が返ってきた。

「あんた、恨み買ってるね、店長。もっと玉を出さないからだよ。それに、あんな派手な車に乗るもんじゃない」

「なんだよ、あんた。誰なんだ？」

「俺も客だが、俺の十倍はすったおっさんが、あんたの車に傷をつけて帰っていった。よっぽど腹が立ったんだろうな。最後に、一発蹴っ飛ばしてたぜ」

「なんだと」

「須佐街道を、別荘地の方へずっと走っていった。白っぽい軽トラックだよ。ありゃ、農家かなんかだな。たまたま見かけたんで、教えてやってる。おたくの店にや、時には儲けさせて貰うこともあるんでね」

「俺の車に、傷をつけたってのは、ほんとか？」

「ああ。百円玉かなんかで、擦ったね。俺は歩いてて、その音でふりむいたんだ」